

コンティグ・アイ

4

本気の商売

8年前に役員3人、アルバイト1人の陣容でスタートしたコンティグ・アイは、数年で経営を軌道に乗せた。現在、社員は12人に増え、本社ビルも手狭にな

っている。大学発ベンチャーで、2008年度の「大学発ベンチャーに関する基礎調査」によれば、国内の大学発ベンチャーの約7割が製品の研究開発段階にあるか、すでに製品を販売しているも赤字か、あるいは赤字でも累積損失を抱えているという。

社長の鈴木繁三はこの「大学発ベンチャー」という言葉も、「環境ビジネス」という言葉も実は好きではないという。大学発や環境というだけで、積極的に支援すべき特別なビ



持続可能な環境ビジネス

次はバイオリファイナリー



ビジネスとして、国など周囲からさまざまな補助を受けている。その状況が経営者の心に一種の甘えを生んでしまうことを鋭く見抜いているからだ。だからこそ同社は、バイオエタノール製造の実証プラント建設やバイオエタノールを使った燃

料電池の実証実験でもあって地元自治体の助成を受けて進めるなど、「本気の商売」にこだわってきた。

人が欲しがると技術

一方で、開発した技術にこだわり過ぎないのが鈴木ら。他社との共同研究や提

若い社員が多い社内。本人のやる気と志で採用が決まる。.....
企業では特に研究者が社長を務めている場合、自分が開発した技術への思い入れが強すぎて、周囲の評価を素直に聞き入れなかったり、研究成果を盗まれることを過度に恐れたりしがちだ。

迅速に世に送る

そんな会社が今後目指すのは、バイオリファイナリー事業の構築。バイオリファイナリーとは再生可能な植物資源を使ってエネルギーや樹脂などの材料を作ること。これまで取り組んできたバイオエタノール事業もその中の一つだが、今後はさらに植物資源の活用範囲を広げようと、バイオブ

用途も研究中だ。同社の売上高は2010年10月期で1億5000万円。現在国内外で建設計画が進められているバイオエタノール製造プラントが順次稼働することで、3年後にはその10倍の15億円を見込む。

世の中が求める技術を独占せず、迅速に研究室から世に送り出すことで地球温暖化や年々深刻さを増す資源問題に解決の道筋を示し、同時に補助金に頼らない本物のビジネスとして、持続可能な環境ビジネスの構築を目指す同社。これからの活動が注目される。

(敬称略)

(一)の項おわり。岐阜・藤井まゆ子が担当しました